



Title	オリエンタリズムとアイデンティティの構造：現象としてのオリエンタリズムとアイデンティティ成立のメカニズム
Author(s)	ベンツェ, フィロー
Citation	若手研究者フォーラム要旨集. 2023, 8, p. 7-10
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92595
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

オリエンタリズムとアイデンティティの構造

—現象としてのオリエンタリズムとアイデンティティ成立のメカニズム—

テキスト環境論 研究生
フィロー ベンツェ

1. はじめに

オリエンタリズムはエドワード・サイードの定義によると、「オリエント」、つまり東洋についての西洋の考え方である上、オリエントを支配しようとする行動様式、帝国主義、植民化の手法やオリエントを支配する手法である¹。サイードの説では、東洋を巡る書物は東洋の一種の解釈に過ぎず、実情の単なる告知ではない。オリエンタリズムは東洋を紹介し、西洋世界にとって理解できるように仕向ける。斯くして、オリエンタリズムは東洋とは縁遠く、それに命を吹き込むのは、東洋よりむしろ西洋である²。ジョン・マッケンジーの解釈では、サイードによるオリエンタリズムは事実を描くのではなく、創造物であり、他者の支配や権力の手法である。多種多様な文化への関心の結果ではなく、欧州がより容易に支配できる定型的で神話上の東洋の創作の手法となっている³。サイードの名作『オリエンタリズム』(1978)⁴からも分かるように、オリエンタリズムは西洋の劣等の東洋に対して自分を優越の立場に位置付ける自己アイデンティティの構造と強く関係し⁵、オリエンタリズムの作用、多様性、自然性や必然性を考察するためアイデンティティの成立のダイナミクスについて考察することを本発表の目的とする。

2. 「ナラティブ」によるアイデンティティ

ギデンズによると自己アイデンティティは個人の行動の継続に与えられるものではなく、定期的で作って保つ必要があるものだ。自己アイデンティティは個人が持つ個別的な性質でもない。ギデンズは、自己アイデンティティは自らの伝記によって、個人がどのように自らを内省的に捉えているのか明らかにし、自己アイデンティティの存在は個人が自己について詳述する伝記「バイオグラフィー」に密着し、ある人のアイデンティティは行動や他人の反応にではなく、特定の「ナラティブ」を維持する能力に潜んでいると指摘している。ところが、他人との交流を日常的に進めるつもりであれば、このバイオグラフィーは完全に架空のものだと成立しえないと主張している⁶。ポール・ギルロイも、人々が自分のアイデンティティを自らで創作するが、自分で選んだ状況の下ではなく、何時も未完成で受け継いだ素材から創作すると説明している。アイデンティティが生産される「原材料」は過去から受け継がれたかもしれないが、その原材料に現在の中で創造的に、楽観的に、たまに本意なく悔しく手が掛けられている⁷。

ピエール・ノラによると記憶は生きている人々の集団が保持するもので、永久に進化している。覚えたり忘れたりして、気づかずに変形し続けて、多様な利用法や操作の対象となる。歴史はすでに存在しないもののいつも未完成で複雑な再建である。記憶は現在に属していて、歴史は過去の代表である⁸。この記憶、歴史は民族や国といった人々の集団のギデンズが述べている「バイオグラフィー」やギルロイの「原材料」になるものではないだろう。こう考えるとある民族や国の共同の歴史を生み出す、絶えず変わっていく記憶はその民族や国の「ナラティブ」であると考えられる。従って、「ナラティブ」によるアイデンティティの成立は個人に限定されるものではないだろう。

¹ Said, Edward (2000). *Orientalismus*. (Translated by Péri B.) Budapest: Európa Könyvkiadó. pp. 9–12.

² Said (2000) pp. 44–46.

³ Kluczevska-Wójcik, Agnieszka (2020). Go East: Orientalism and Japonisme in the Austro-Hungarian Monarchy. In: Mirjam Dénes, et al. (eds.) *Japonisme in the Austro-Hungarian Monarchy*, 77–91. Budapest: Ferenc Hopp Museum of Asiatic Arts. p. 78.

⁴ 初版は Said, Edward W. (1978). *Orientalism*. New York: Pantheon Books. であるが、本発表で 2000 年出版のハンガリー語訳を使用。

⁵ Morely, David and Robins, Kevin (1995). *Spaces of Identity: Global Media, Electronic Landscapes and Cultural Boundaries*. London and New York: Routledge. pp. 154–155. Phillips, Kim M. (2014). *Before Orientalism: Asian Peoples and Cultures in European Travel Writing, 1245–1510*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press. p. 15.

⁶ Giddens, Anthony (1991). *Modernity and self-identity: self and society in the late modern age*. Cambridge: Polity Press. pp. 52–54.

⁷ Gilroy, Paul (1997). Diaspora and the Detours of Identity. In: Kathryn Woodward (ed.) *Identity and Difference*, 301–346. London, Thousand Oaks and New Delhi: Sage Publications and Milton Keynes: The Open University. p. 304.

⁸ Hobsbawm, Eric (1989). *The Age of Empire 1875–1914*. New York: Vintage Books. p. 1.

スチュアート・ホールはカルチュラル・アイデンティティの二つの定義を定めて、二つ目によると、カルチュラル・アイデンティティは「ある」だけではなく「なっている」ものだ。その居場所は現在と未来の両方にあり、すでに存在していて、場所、時間、歴史や文化を超えるものではない。カルチュラル・アイデンティティは由来と歴史があるが、全ての歴史的なものと同様に絶えず変わっていく。永遠に本質化された歴史に固定しているものではなく、歴史、文化や権力の変遷の対象となる。過去の回収に基づいて自己感覚を永久的に固定するものでなく、アイデンティティは、我々が過去のナラティブの中で位置付けられたり、自分たちを位置付けたりする様々な立場に与える名である⁹。エリック・ホブズボームの「伝統の創作」の説もこの「ナショナル・ナラティブ」の成立に繋がっているだろう¹⁰。

阿部によるとアイデンティティは自ら生まれるものではなく、他者と触り合うことを通して「自己」と「他者」の違いが明らかになり、自分は何ものかが理解できる¹¹。しかし、アイデンティティが出来上がるように他者がそのアイデンティティを認める必要があり、自分にとって重要な他者が自分のアイデンティティを認めない限りでは、そのアイデンティティは覚束ないと論じる¹²。なぜなら他者の承認によってそのアイデンティティが確立されるからである¹³。

筆者の意見ではナラティブによる概念のほうがオリエンタリズムを考えると適切である。なぜなら、近代日本がアジア諸国に対して優越感を持って、その承認が必要としない¹⁴ことと同様に、自分を優越とみなす帝国主義的で植民する西洋はオリエンタリズムの対象となるオリエントの承認を求める可能性が低いだろう。もちろん、西洋の優越を訴えるアイデンティティは東洋の承認を経てさらに堅くなって安定する一方ではあるが、アイデンティティの成立には必要ではないと思われる。そのため、ナラティブによる概念はオリエンタリズムを行う西洋の自己定義の仕組みをより説明するではないかと考えている。

以上よりアイデンティティの構造が完全に架空ではないまでも実情の描写が目的ではない内部のナラティブに定められているという一面も、そしてそのナラティブが共同の歴史、記憶、現状の変遷と結びついていることが明らかになった。これは、オリエンタリズムはなぜ東洋より西洋を対象とすることの説明となるだろう。が、オリエンタリズムの二分法に頼る性質を明らかにしていないため、ヴッドヴァードの説に目を向けたい。

3. 差異の重要性

ヴッドヴァードの説では、アイデンティティは我々を世界の中で位置付けて、住んでいる社会と繋ぐものである。アイデンティティは文化の枠組みの中で作られて、消費されて、律されるもので、表象の記号システムを経て採用可能なアイデンティティ・ポジションに関する意味を作っている¹⁵。表象というものは「我々は何ものか」と理解できるようにする「意味」を作るものである。表象は個人的や集団的なアイデンティティを設立し、記号システムは「私は何ものか」「私は何になれるか」「私は何になりたいか」という質問に有り得る答えを与える。表象のシステムとあらゆるディスクールは個人が自分を位置付けて、発言できる場所を構成する¹⁶。つまり、アイデンティティは自己を位置付ける上、表象や記号に頼るものだ。

ヴッドヴァードの説にアイデンティティは対照的で、しばしば自己と他者の二分法に基づく構造を作り、差異の表記はアイデンティティ・ポジションの構成において肝要であることも明らかになった。そして、この差異は記号システムを通して再生産される。人類学者のメアリー・ダグラスは、文化の中で物事や人は分類システムの中で様々なポジションに割り当てられることを通して意味が与えられ

⁹ Hall, Stuart (1990), *Cultural Identity and Diaspora*. In: Jonathan Rutherford (ed.) *Identity: Community, Culture, Difference*, 222–237. London: Lawrence & Wishart. p. 225.

¹⁰ Farkas, Ildikó (2013). The Japanese Nation Building in European Comparison. *Acta Asiatica Varsoviensia* 26, 7–28. p. 10.

¹¹ 阿部 潔 (2001) 『彷徨えるナショナリズム——オリエンタリズム／ジャパン／グローバリゼーション——』 京都：世界思想社 p. 39.

¹² 阿部 (2001) pp. 69–70.

¹³ 阿部 (2001) p. 83.

¹⁴ 阿部 (2001) pp. 89–90.

¹⁵ Woodward, Kathryn (1997). Introduction. In: Kathryn Woodward (ed.) *Identity and Difference*, 1–6. London, Thousand Oaks and New Delhi: Sage Publications and Milton Keynes: The Open University. pp. 1–2.

¹⁶ Woodward, Kathryn (1997). Concepts of Identity and Difference. In: Kathryn Woodward (ed.) *Identity and Difference*, 8–61. London, Thousand Oaks and New Delhi: Sage Publications and Milton Keynes: The Open University. p. 14.

るため差異の標記は文化の基礎であると主張している。差異はしばしば反対の形でアイデンティティとアイデンティティを分けて、区別を樹立するものであるため、差異の標記は全ての分類の肝要な要素であると述べている¹⁷。ホールも差異の関係をなしに表象は起こり得ないと述べている¹⁸。ギルロイもこの説を裏付けて、全ての「自己」の成立はある「他者」を除外せざるを得ず、アイデンティティは差異の標記に頼ると主張している¹⁹。

斯くして、オリエンタリズムに現れる強い二分法はアイデンティティの成立の一部のみならず、自己や他者に関する理解の要素でもある。記号や表象は自己の理解や差異の再生産を方向づけて、そして差異の標記は採用可能なアイデンティティ・ポジションを制作する。なお又、ウッドヴァードはあるアイデンティティは他のアイデンティティ、自分ではないものの関連で現れると提言し、この構造が二項対立の形で最も頻繁に現れると指摘している。ウッドヴァードは、ソシュールの言語論は、差異の標記の最も極端な形である二項対立は意味の生産には不可欠であると主張していると述べている²⁰。が、ジョナサン・ラザフォードは二項対立の危険に焦点を当て、意味の異質のオプションを言語の中で固定の二分法に入れることを通して、その二項対立は差異の可能性を正反対に単純化すると説明している²¹。オリエンタリズムもこの単純化の結果として生まれた正反対の犠牲になったことはないだろうか。

以上を踏まえて、二分法、言い換えると差異の特定は意味の形成に不可欠であり、差異の標記の上、表象や記号システム、斯くしてオリエンタリズムと自己アイデンティティの創作と他者に関するいかなる理解に相互関係があるという意味になるだろう。表象や記号はアイデンティティを生み出し、アイデンティティは差異に基づく二分法を作る。オリエンタリズムはこれらの過程の特定の文化での現れ方であると考えられるだろう。

4. オリエンタリズムの必然性

ギデنزやウッドヴァードの説はオリエンタリズムの自己中心的で差異に集中する性質を説明する上で、その自然性を指摘しているだろう。ルスコラの思考もこの仮説を裏付けると考えられる。偏見や政治的な損得が西洋の学術にネガティブな影響を与えたと言うことをサイドの批評家も認めたが²²、オリエンタリズムを敢えて権力と同一と見なすことはない。ルスコラによると、伝統は先入観を持った目で世間を見させるため偏見を消し去ることはできない²³。

言い換えると、他者との交流が偏見のために可能となり、他者に関する先入観のためにその他者は主体となる。が、これらの偏見や先入観は疑いなく他者を拘束するため、オリエンタリズムとオリエンタリズムの区別をつけるのはそれぞれの使い方であるとルスコラが主張する²⁴。つまり、オリエンタリズムは必ずしもネガティブなものではなければならないわけではなく、むしろ法則的と言ってもよい。ルスコラによると、偏見は理解の前提であると認めれば、アルキメデスの点から観察する必要はない。対照は他者と関わり、関係を結ぶただ一つの用法であるため、反オリエンタリズムの姿勢は衝突を解決しないと説明している。そのため、オリエンタリズムを消し去るのではなく、文脈の枠の中にはめ込まなければならないと指摘している²⁵。

5. 結論とこれからの課題：「フロンティア・オリエンタリズム」のアイデンティティ

以上より、アイデンティティのナラティブによる基本的な構造、差異に頼る性質、オリエンタリズムの役割と自然性が明らかになったが、本研究はこれで終わっていない。ホールは、我々は何時も特定の所や時間、歴史や文化から発言し、我々の言うことは何時も位置付けられて、文脈の中にあると

¹⁷ Woodward (1997) *Concepts of Identity* pp. 29–30.

¹⁸ Hall (1990) p. 229.

¹⁹ Gilroy (1997) p. 302.

²⁰ Woodward (1997) *Concepts of Identity* p. 35.

²¹ Rutherford, Jonathan (1990). A Place Called Home: Identity and the Cultural Politics of Difference. In: Jonathan Rutherford (ed.) *Identity: Community, Culture, Difference*. 9–27. London: Lawrence & Wishart. pp. 21–22.

²² Prakash, Gyan. (1995). Orientalism Now. *History and Theory* Oct., 1995, Vol. 34, No. 3, 199–212. p. 203.

²³ Ruskola, Teemu (2002). Legal Orientalism. *Michigan Law Review* Oct., 101, 179–234. p. 222.

²⁴ Ruskola (2002) p. 229.

²⁵ Ruskola (2002) p. 225.

主張し²⁶、吉原は、歴史的や思想的な環境はオリエンタリズムのあり方も、その背景にある思想も、そして文化での現れ方も変化させると指摘する²⁷。ラザフォードも、アイデンティティは我々の過去と社会的、文化的、経済的な関係の連結を標記すると説明している²⁸。サイドがオリエントと言う時、近東やイギリス、フランス、米国といった西洋の国の間にある関係に注目していたが²⁹、これらの国と異なる歴史的、文化的な環境の国の場合は、オリエンタリズムはどのような形を取るだろう。この点に関する知識を深めるよう、イギリス帝国と同じく植民地帝国の時代³⁰に、1867年から1918年まで存在していた³¹オーストリア＝ハンガリー帝国に焦点を当てたい。

サイドのオリエンタリズムは西欧に注目するが、中央ヨーロッパの場合は「フロンティア・オリエンタリズム」の方が適切で³²、オリエントに関するイメージはそれと絶えずに、貿易か戦争といった交際し合いながら形成された理由でサイドの説はオーストリア＝ハンガリー帝国といった中欧諸国には完全に及ばない³³。アンドレ・ギングリッヒはイスラム界や植民化ではなくオスマン侵攻を通して東洋と出会った中央と東ヨーロッパ人のオリエントに対する認識を説明するように「フロンティア・オリエンタリズム」という観念を打ち立てた³⁴。「フロンティア・オリエンタリズム」の枠組みでは、危険であるからこそ悪のオリエントに境界に脅かされて囲まれるという神話的な形勢が中心となっている³⁵。中央ヨーロッパ地方に対しては、東洋は観察、学問や征服の対象や芸術のインスピレーションとなる遠方にあるエキゾチックな世界のみを意味していたわけではない。この地方に対しては危険な隣接する世界も意味していて、この東洋と数世紀間戦い続けた中央ヨーロッパ人のアイデンティティの形成に重要な役割を果たしたようだ³⁶。フロンティア・オリエンタリズムの性的側面はこの好例であろう。サイドのオリエンタリズムの受動的で女性的なオリエント像に対して、ポーランドやハンガリーの文学作品などは男性的な姿勢で現れるオリエントの脅威による自己アイデンティティに対する自信喪失や不安心を明かしている³⁷。

「フロンティア・オリエンタリズム」は中央ヨーロッパの東洋との繋がりほかにヨーロッパ自体での位置についても有意義である。中央ヨーロッパはヨーロッパの境界、周縁にあつて、ヨーロッパの一部である同時に外部でもある³⁸。サミュエル・ハンティントンの文明論でも現在、ポーランド、チェコ、スロバキア、ハンガリー、スロベニア、クロアチアといった国が占める地域は西洋文明の周縁で境であると説明されている³⁹。ハンガリーの二次元的なアイデンティティはハンガリーのオリエンタリズムにも特別な気風を与えた⁴⁰。オリエントに関しては中央ヨーロッパでも西欧とあまり異ならない前時代的な認識も存在していたが、「ナショナル・リバイバル」運動の影響で自分の国家に関するロマンチストのイメージの方が多かったようだ。オリエンタリズムはハンガリー人の東にある原始へ指し⁴¹、中世から19世紀にかけての時代は自分の国家の原始はオリエントに繋がっていると考えた中央ヨーロッパ諸国に「自己オリエンタリズム」をもたらし⁴²。本発表の内容を踏まえて、アイデンティティの構造とオーストリア＝ハンガリーによるオリエンタリズムの検討を通して、オリエンタリズムの本質を理解できるかもしれない。本研究をこの方向で続けたいと考えている。

²⁶ Hall (1990) p. 222.

²⁷ Yoshihara, Mari (2003). *Embracing the East: White Women and American Orientalism*. Oxford: Oxford University Press. p. 6–7.

²⁸ Rutherford (1990) p. 19.

²⁹ Said (2000) p. 36.

³⁰ Hobsbawm (1989) p. 57.

³¹ A.J.P.テイラー著 (2021) 『ハプスブルク帝国 1809–1918：オーストリア帝国とオーストリア＝ハンガリーの歴史』（倉田稔訳）東京：筑摩書房 p. 261. p. 486.

³² Farkas, Mária Ildikó (2020). Imperial Identity and National Identities as Impacted by Japonisme in the Austro-Hungarian Monarchy. In: Mirjam Dénes, et al. (eds.) *Japonisme in the Austro-Hungarian Monarchy*, 43–54. Budapest: Ferenc Hopp Museum of Asiatic Arts. p. 43.

³³ Kluczevska-Wójcik (2020) p. 81.

³⁴ Gáfrík, Róbert (2020). Chapter 11: Imagining the Orient in Central Europe: An Intercultural Studies Project. In: Dorothy Figueira (ed.) *Rebuilding the Profession: Comparative Literature, Intercultural Studies and the Humanities in the Age of Globalization. Essays in Honor of Mihai I. Spărosu*, 175–187. Göttingen: V&R unipress. p. 182.

³⁵ Iványi, Márton Pál (2022). “Double enemies” within the Gates: The Oriental Ismaelite Others, as a Variant of Central European Frontier Orientalism in Hungarian Historical Fiction. *Central European Cultures* 2, 19–36. p. 25.

³⁶ Farkas (2020) p. 43.

³⁷ Sabatos, Charles (2018). The nation’s “timeless mission”: Frontier Orientalism in Central European historical fiction. *World Literature Studies* Vol. 10 No. 1, 3–14. p. 6. Ostrowska, Elżbieta (2011). Desiring the Other: The Ambivalent Polish Self in Novel and Film. *Slavic Review* 70, no. 03, 503–523. p. 507. Iványi (2022) p. 25. ポーランド人のヘンリク・シェンキェヴィチの『*Pan Wołodźjowski*』（1888）や『*Ogniem i mieczem*』（1884）とハンガリー人のガルドニ・ゲーザの『*Egri csillagok*』（1901）やマツカイ・シャンドルの『*Táitoskirály*』（1934）は文学作品の事例として挙げられる。Sabatos (2018) p. 6. p. 8. Ostrowska (2011) p. 507. Iványi (2022) p. 25.

³⁸ Gáfrík (2020) p. 176.

³⁹ Farkas (2013) p. 21.

⁴⁰ Gáfrík (2020) p. 178.

⁴¹ Klein, Rudolf (2006). Oriental-Style Synagogues in Austria-Hungary: Philosophy and Historical Significance. *Ars Judaica* 2, 117–134. p. 132.

⁴² Gáfrík (2020) pp. 180–181.